アーツ前橋の情報誌
&Arts
アンドアーツ

第2号

COMMUNITY ART PROJECT

〈特集〉アーツ前橋の地域アートプロジェクト

アート＝美術館の展示室に置かれた作品？ いえいえ、それだけではありません。前橋の歴史物語を伝える新しいお祭り、地元の人々の古着とそれにまつわるエピソードから生まれた美術館の制服、赤城山の神事にちなんだ食のイベント。これらはすべてアーツ前橋の「地域アートプロジェクト」で生まれた作品です。アーティストの創造力と地域特有の魅力、そしてあなたが出合うことで可能性が大きく拡がる、未知のプロジェクトへようこそ。

Contents

Feature　関わればもっとおもしろい！ 地域アートプロジェクトの魅力
〈風の食堂 in 粕川〉by 風景と食設計室ホー ができるまで
アーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）とは？

Works　あれ、誰かに見られてる!?　山極満博の常設作品

Column　アーティストコラム：藤野高志

Report　人間の本性をあぶり出す小泉明郎、初の大規模個展

Information　2015年10月～2016年3月の展覧会スケジュール

アーツ ARTS 前橋 MAEBASHI

① 関わればもっとおもしろい！ 地域アートプロジェクトの魅力

ランドスケープデザインを行うEARTHSCAPEは、空き地となっていた銀座通りのもてなし広場に、体の部位ごとに効能があるとされている薬草を植えた人型の庭「ハーブマン」を設置。県内の農家の方々によるマルシェも行われました。（2015年3月で終了）

ソウルを拠点とするヘヴン・ベクは昨年秋から竪町スタジオに滞在し、記憶を刻む道具《Scratchers》を制作。赤城山・大沼の凍った湖面をひっかくパフォーマンスを映像作品化。

白川昌生は前橋の歴史をもとに、萩原朔太郎ら地域ゆかりの人物が登場する物語〈駅家の木馬祭り〉を創作。その象徴となる木馬を子どもたちと制作し、実際にお祭りを開催。

西尾美也とファッションブランドFORM ON WORDSは、ワークショップでアイデアを集め、古着とそれにまつわる逸話を募り、アーツ前橋のスタッフユニフォームを制作しました。

幸田千依が伊藤存と共に行ったのは、元銭湯「磯部湯」での公開制作と作品展示。2013年秋から約2カ月間は現場に滞在、前橋の風景や来場者との会話を織り交ぜた絵画が完成。

アートの世界で新しい表現が求められる一方で、地域固有の文化が継承されずに衰退しつつある今、独自の視点や感性、手法を持ったアーティストが地域の人々の日常生活や経済、社会、自然環境と出合い、まちなかを舞台に展開するアートプロジェクトが、注目を集めています。

「創造的であること」「みんなで共有すること」「対話的であること」をコンセプトに掲げるアーツ前橋では、2013年の開館以前からこれまでに16組のアーティストとプロジェクトを実施してきました（2015年9月時点）。そもそも前橋には、赤城山、榛名山を望み、利根川や広瀬川、粕川が流れる豊かな土壌があり、伝統行事や萩原朔太郎の詩などの文化が育まれたユニークな土地。そうした地域性を活かし、美術館の主要な活動のひとつとして地域アートプロジェクトを継続的に実施していることは、アーツ前橋の大きな特徴です。

さて、アーツ前橋の地域アートプロジェクトに登場するメンバーは、アーティスト、美術館スタッフ、そして地域に暮らす人々。交流の仕方、制作の進め方はアーティストやテーマによって異なりますが、それぞれが互いに開き合い、関わり合う過程において、想定を超えたコラボレーションの成果が生まれ得るのです。

こうしたプロジェクトに関わることは、作品に影響を及ぼすだけでなく、あなたの身近に埋もれていたものへの新しい気づきや、問題を考えるきっかけをくれるはず。ぜひ注目して、積極的に参加してみてください。

アーツ前橋の担当学芸員に聞く「地域アートプロジェクトの楽しみ方」

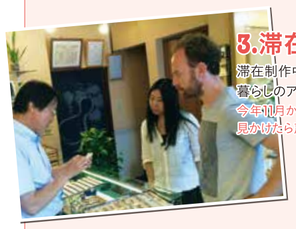
アーツ前橋 学芸員 家入健生

1.アーティストと話す

アーティストによっては制作現場を開放することがあります。そこでは制作過程を見るだけでなく、対話することもできます。
磯部湯で公開制作を行った幸田千依（左）。

2.ワークショップに参加する

多くのアーティストが地域の人々との共同制作の場として、ワークショップを開催しています。
〈あかりプロジェクト〉を行った高橋匡太の《ひかりの実》をつくるワークショップ。



3.滞在をサポートする

滞在制作中の作家に前橋のことを教えたり、暮らしのアドバイスをしてあげることも。
今年11月から滞在制作をするダラ・リーブス（右）。見かけたら声をかけてみてください。

4.成果を鑑賞する

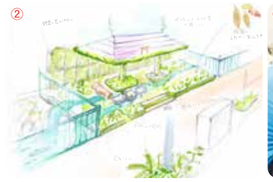
地域の方だからこそ、作品を通じて発見できる前橋の魅力があるはずです。今年の10月18日には、白川昌生による物語〈駅家の木馬祭り〉にちなんで、商店街を練り歩くお祭りが開催されます。

③ アーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）とは？

地域アートプロジェクトでは、アーティストがその地域である程度の時間を過ごすことが必要となります。アーティストが何度も通う場合もありますが、一定期間居住しながら制作するという形もあります。その際に必要な空間を提供するのが「アーティスト・イン・レジデンス（AIR／滞在制作）」。

アーツ前橋では制作スタジオと居住スペースを備えた「竪町スタジオ」を2014年より運営。国内外のアーティストを招いて滞在制作を支援しています。そこで出来上がる作品はもちろん、制作プロセスに参加できることも魅力となります。

写真は10月9日から行われる展覧会「ここに棲む―地域社会へのまなざし」に出品するため、8月から約1カ月間滞在制作を行った木村崇人。街でありつつも豊かな自然が身近にある前橋に暮らしながら、赤城山のリサーチを中心に行い、自然と人との繋がりを感じられるような作品を屋外に設置します。



① 滞在制作の拠点となる「竪町スタジオ」。1階はスタジオ、3・4階は滞在スペース。 ② 木村の作品プラン。 ③ 滞在制作が始まって、まずは赤城山の自然や植生を中心にリサーチ。 ④ 植物を使った作品をまちなかに設置するため、プランターを竪町スタジオで制作。大学生やサポーターと約70個のプランターを作りました。 ⑤ 作ったプランターに植栽。この植物たちは約1カ月間、アーツ前橋近隣のお店の方々やサポーターに預かってもらいます。

木村崇人（きむらたかひと）
1971年、愛知県出身。東京芸術大学大学院博士課程修了。「地球と遊ぶ」をコンセプトに「地球の持つ見えない力を知覚する装置」を制作し、作品を体験することで、ものごとを情報としてではなく実感できる体験型の作品を主に制作している。 個展：アサヒアートコラボレーション「森を遊ぶ・木村崇人展」（2008）、「木村崇人 森_living」（2009）、「星の木もれ陽を探して」（2011）、「テーブルの上／下から　木村崇人」（2015）他。グループ展：「越後妻有アートトリエンナーレ2003、2006、2012」、「瀬戸内国際芸術祭2010、2013」、「あいちトリエンナーレ2010」他。
www.takahitokimura.com

② 〈風の食堂 in 粕川〉by 風景と食設計室ホー ができるまで

食を通して表現活動を行うユニット「風景と食設計室ホー」が粕川地区を舞台に、集大成的なツアーを目指して進行中の地域アートプロジェクト〈風の食堂 in 粕川〉。そのプロセスの一部をご紹介します。

リサーチ その1 ○ 2014年12月
「前橋市粕川地区の食をテーマとしたプロジェクトを」とアーツ前橋から依頼された「風景と食設計室ホー」（以下ホー）の二人は、昨年の冬に粕川の地を初訪。史跡や民俗資料館、酒造、民家、赤城山などを地元の方に誘われて訪ね歩き、地域に暮らす人々にこの地の風習や食文化について聞いて回る中で、地名の由来にもなっている、川に酒粕を流す神事「粕流し」に着目することに。

プレイベント ○ 2015年5月
今年の3月7,8日には、プロジェクトを紹介するイベント〈喫茶粕川 ―神さまがたべるもの―〉を実施。粕川の酒粕などを用いたメニューを、粕川から見た赤城山の形のプレートに盛り付けて提供しました。美術館のカフェのテーブルには、地元の方に作り方を教わった繭玉やケズリバナなどのお供え物も展示。参加した地元の方は「懐かしい」と喜び、当時のエピソードを披露していました。

リサーチ その2 ○ 2015年7月
プレイベントの結果として、「地元のみなさんが当然のように『赤城山に神がいる』と信じていることを再認識した」というホーの二人は、その手応えをもって、7月下旬に粕川地区と赤城山を再訪。粕川上流に位置する赤城山最大の滝、不動大滝をはじめ、滝沢不動尊、前不動などを再び地元のコーディネーターの方と巡り、構想中のツアーのコースとそこで発表する内容を検討しました。

リサーチ その3 ○ 2015年8月
8月下旬には、粕川へ再びリサーチに訪れました。メインは今回のプロジェクトを考えるきっかけとなった粕流しの神事「ささら祭り」を見ること。この神事は600年以上も続くといわれ、粕川の名前の由来ともなっています。「赤城山は豊かな植生が残っていて、ふつうに登ってもおもしろい場所。そのハイキングの道々に物語と食べ物が現れるツアーを企画しています。ぜひ神の気配を感じてみてほしいですね」（永森）

今後の活動はアーツ前橋のウェブサイトで！

風景と食設計室ホー
高岡友美と永森志希乃によるユニット。ランドスケープデザイン事務所を経て、2012年3月より始動。「遠くの風景と、ひとさじのスープ。世界と、わたしの手のひらは、繋がっている。」をコンセプトに、食を風景・文化・社会の切り口から捉え、その時その場所でしか体験できないインスタレーションを展開。フードプレゼンテーション、アートプロジェクト、デザインなど幅広く手がける。2015年より東京と富山の2拠点で、さらに広がりのある活動を目指している。ホーという名はふくろうの鳴き声から。

アーツ前橋の館長に聞く「地域アートプロジェクトを行う意味」

アーツ前橋 館長 住友文彦

アーツ前橋は開館を準備しながらアーティストと一緒に地域と関わってきました。こうしたプロジェクトは展覧会とは異なり、多くの関係者と話し合い長い時間をかけることになります。私たちもその過程で多くの人や団体と関わってきました。表現者が社会、経済、福祉や自然環境と出合うことで、私たちが普段見過ごしていることに気づいたり、関係なかったものが結びつきます。

そんな楽しみを味わうには、できあがったものを見るよりも一緒に悩んだり、考えたり、手伝ったりするのがいいかもしれません。地域と表現の両方の可能性を広げてくれるプロジェクトをこれからも行っていきたいと思います。

Works　コミッションワーク

あれ、誰かに見られてる!?　山極満博の常設作品

子どもの手を離れて木の枝に引っかかったような風船。こちらをじっと見つめて今にも飛びかかってきそうなムササビ。これらは山極満博によるアーツ前橋のコミッションワーク(恒久展示)3つのうちの2つです。

1969年、長野県生まれの山極満博は、「自分」と「世界」、「見ること」と「見られること」などについて、さまざまな形で繊細かつユーモラスに表現するアーティスト。アーツ前橋の開館時に設置された作品は、いずれも美術館という、ともすれば「ただ受動的に見るだけ」となってしまいがちな場で、それにとどまらない体験によって、美術鑑賞の姿勢、さらには世界の見方を切り替えさせてくれます。

風船の作品《ちいさなおとしもの》は、多くの人が一度は目にしたことがあるであろう光景をつくり出すことで、風船を手放した誰かの存在をイメージさせます。この作品と出合った人は、かつて観た映画や幼少期の体験など、それぞれに何かしらの物語を思い浮かべるでしょう。ムササビの《うんどうといどう》では、作品を「見る」つもりで来たはずが、「見られる」ことで、改めて「見る」という行為を意識することになります。また、写真にないもうひとつの作品《うちのそと》は、注意深く見ないと分からないところで光っています。どの作品も建物のつくりや機能に合わせて置かれているので、見上げたり、しゃがんだりして、探してみてください。

左:《ちいさなおとしもの》　右:《うんどうといどう》(有料スペース内に設置) いずれも2013年の美術館開館時に制作された作品。
©YAMAGIWA Mitsuhiro

Report　展覧会・イベントレポート

人間の本性をあぶり出す小泉明郎、初の大規模個展

1976年、群馬県邑楽郡に生まれ、前橋で育った小泉明郎は、イギリスで映像表現を学び、若くして国内外で高い評価を受けてきた、世界的に最も注目されている日本人アーティストのひとり。そんな彼の公立美術館では初めての個展が、3月21日〜6月7日にアーツ前橋で開催されました。

家族、戦争、障がい、神……といったテーマを扱い、映像やパフォーマンスを通じて「人間とは何か?」という問いを追求する小泉作品は、その多くに人間の感情を揺さぶるような演出が施され、鑑賞者の心を強く揺さぶり、私たちの身体と精神の問題として立ち現れます。

「捕われた声は静寂の夢を見る」と題した今回は、初期作品から新作までの映像やドローイング、彫刻など17点を展示。アーツ前橋の回廊のような空間に応じて、音の混ざり合いや明暗の変化による効果も含め、ひとつの大きな作品を鑑賞するように構成されました。

1階から地下へと下るプロムナードの階段には、口笛で「蛍の光」を吹きながら紙に鉛筆で殴り書きする《無題》(2000年)が。鑑賞者を不穏な雰囲気へと招き入れます。4つのモニターを使った《劇場は美しい午後の夢を見る》(2010-2015年)は、電車の中で精神異常者のように振る舞う男性と、周りで無関心を装う乗客たちをとらえた映像。後者には身につまされる思いがします。

ハイライトは、前橋空襲の体験者が防空壕のような空間で当時の記憶を語る新作《捕われた言葉》と、そこに至るまでの戦争に関わる作品の数々。特攻隊員に扮した若い役者が父母に別れを告げる《若き侍の肖像》は、「もっとサムライ魂を!」などという小泉の演出により、静かな演技が嗚咽混じりの過剰なものになっていきます。また、この作品と空間を共有している《ダブル・プロジェクション#1 ―沈黙では語れぬこと》は、飛行機の故障で特攻がかなわなかった戦争体験者が、亡くなった戦友になり代わって現在の自分と対話する、一人二役の映像。定型化していた語りが変調していく様子が見られます。

画面の中の見知ったような光景を傍観していると、予期していなかった人間の感情の揺れや身振りが露わになり、悲劇とも喜劇ともつかない展開に鑑賞者は戸惑う。そしてフレームの外にあった視点の在り処に気づいた頃には、自分自身がどう向き合うのかという鋭利な問いが喉元まで突きつけられている気さえするのです。

会期中には《捕らわれた言葉》に出演した原田恒弘氏とのトークイベントや国策映画の上映会も行われ、「誰も観たことがない事件のような瞬間」を生み出す小泉明郎の、ときに暴力的なまでに真摯な制作姿勢が伝えられました。　(文:小林沙友里)

左:《若き侍の肖像(4チャンネル・バージョン)》(2009年)　右:《ダブル・プロジェクション#1 ―沈黙では語れぬこと》(2013年)

Column　アーティストコラム

藤野高志 | FUJINO Takashi

「アーティストのおすすめ○○」を聞くこのコラム。今回は、10月9日からの展覧会「ここに棲む ― 地域社会へのまなざし」に参加する建築家の藤野高志さんに、人生で感銘を受けた「本」を挙げてもらいました。藤野さんのバックグラウンドがうかがえます。

人は成長の中で様々な本に出会い、そのときしか感じられないことを本から得る。本は一期一会。今回、私のそれぞれの時代において感銘を受けた本を紹介したい。

いわさきちひろの絵本
35年くらい前の幼少期。母が好きだった絵本。秋の陽射しのような心持ちになり、沈んでいるときも逃避できる。

『風の谷のナウシカ 全7巻』宮崎駿
25年くらい前、中学生の頃。答えはなくとも生きねば。絵の表現、世界の捉え方、自然へのスタンスなど最も影響を受けた本。のちに私の向かう道を照らしてくれた。

『陰翳礼讃』谷崎潤一郎
20年前、大学での最初の建築授業、磯崎新の光の記述からこの本に導かれた。日本人であって良かったと思える。口に含む羊羹の表現が印象的。布団の中で読むと良い。

『建築家なしの建築』B・ルドフスキー
16年前、研究室の本棚で。そのころ学んでいたアカデミックな建築が、一夜にして相対化される。人間と建築の、のっぴきならない関係に興味を向けるきっかけ。

『海の向こうで戦争が始まる』村上龍
14年前の会社員時代。東京の満員電車で村上龍とバタイユをよく読んだ。爆弾とナイフ。本を見ると、脳内に椎名林檎が流れ、鼻を突く終電の嘔吐物の臭いを思い出す。

『金閣寺』三島由紀夫
10年前、会津の山あいの、わずか三畳の小屋で暮らしていた頃、大自然の中で建築と身体が一体化する高揚感の中におり、精神さえも建築に重ねる主人公に共感した。

『生物から見た世界』ユクスキュル／クリサート
4年前スタッフに勧められた本。独立以来モヤモヤ悩んでいたことの答えがあった。世界は無数にある。様々なものが同時に存在する奇跡を、私も伝えたいと思った。

1975年群馬県生まれ、群馬県育ち。2000年東北大大学院博士前期課程を修了後、清水建設、はりゅうウッドスタジオ勤務を経て、2006年生物建築舎設立。2012年〜2014年東北大学非常勤講師。2012年〜前橋工科大学非常勤講師。2013年「天神山のアトリエ」にて、日本建築学会作品選集新人賞を受賞。建築家としての活動の他、国内外の美術館やギャラリーでの展覧会、芸術祭、講演会、絵本、動画制作など幅広く活動している。

Information　展覧会スケジュール

ここに棲む ― 地域社会へのまなざし
2015年10月9日(金) ▷ 2016年1月12日(火)

第50回前橋市民展覧会
美術部門:2016年1月28日(木) ▷ 2月2日(火)
写真部門:2016年2月11日(木) ▷ 2月16日(火)
書道部門:2016年2月25日(木) ▷ 3月1日(火)

Art Meets 03
2016年3月19日(土) ▷ 5月31日(火)

田中青坪展
2016年3月19日(土) ▷ 5月17日(火)

アーツ前橋
ARTS MAEBASHI

〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16
TEL:027-230-1144 ／ FAX:027-232-2016

www.artsmaebashi.jp

ROBSON COFFEE ARTS MAEBASHI [ロブソンコーヒー アーツ前橋]
営業時間 11:00〜20:00 (日は19:00まで)
定休日 水・年末年始　TEL 027-233-3005

ミュージアムショップmina(ミーナ)
営業時間 11:00〜19:00
定休日 水・年末年始　TEL 027-289-8094

アーツ前橋の情報誌 アンドアーツ &Arts

発行:平成27年10月1日／企画発行:アーツ前橋／制作コーディネート:一般社団法人ノマドプロダクション／
編集:橋本誠／文:小林沙友里／デザイン:安藤次朗／写真:木暮伸也(表紙、☆)